

〔書評〕

野村幸一郎著『白洲正子 日本文化と身体』

——文明批評家としての白洲正子——

伊 藤 典 文

白洲正子は『西行』の後記（あとがき）で、「西行の歌には「あくがるる心」とか「空になる心」とか、「うかれ出づる心」とか、そういったような歌詞が多く、密着すればするほど外へ外へと誘い出すものがあり、根が浮かれやすいたちの私は、その誘惑に抗することはできなかった」とし「総じて辻褄が合うような人間はろくなものではなく、まよまりのつかぬところが西行の真価がある」と、述べている。

これは西行のことを語ってはいるが、白洲正子自身のことを言っているようである。辻褄を合わせて事足りるという印象からほど遠く、まよまりのつかぬところで感覚と身体で（舞ったり、歩いたり）勝負する女性の姿である。

そんな「まよまりのない」正子の日本文化に関するさまざまな言説が、〈近代〉を自明とする私たちの日本の伝統文化に対する考えや認識に亀裂を入れるものであるとし、それを受け止め明らかにしようと挑戦した書が、この、野村幸一郎著『白洲正子 日

本文化と身体』である。

随筆家として一括りにされてしまう白洲正子を、思想家、文明批評家として読みこなしている。

白洲正子はその華麗な経歴が邪魔をして、その伝記的なエピソードが多く語られてきたが、正子の言説を日本文化論として真正面から論じられるものはこれまでなかった。この著は、能の演者としての体験が自ずと正子の感性となり思弁となるという身体論に裏打ちされた白洲正子の思想を明らかにしようとするものである。

まず、全体を眺めてみよう。全体は五章からなる。

序・はじめに

第一章 小林秀雄との邂逅

第二章 能楽へのまなざし

第三章 日本人と信仰

第四章 「かくれ里」という場所（トポス）

第五章 神仏習合の美学

以上である。順次見ていくことにする。

序章にあたる「はじめに」でまず白洲正子の思想の問題圏を提示する。

『西国巡礼』が書かれた高度成長期のまっただ中、日本中が東京オリンピックで沸き立っていた頃である。白洲正子は、それに背を向けて旅に出て、土俗的な民俗社会に目を向けようとしていたことは、正子の日本文化論を理解する上で示唆的であると野村氏は指摘する。それは「近代化の中で神話的空間であることをやめた山や森に神秘性を取り戻す試み」であり「山を神体山として、森や岩、巨木をエロファニー（聖体示現）としてとらえ直す」とするものとしてである。神仏分離にはじまる均質化された近代日本の形成過程で「創られた伝統」によって隠蔽されてしまった、本来の日本文化を取り戻す試みでもあった。

神仏習合こそ本来の日本文化、民俗文化とする正子の思想は「近代」や「科学」という自明性に亀裂を入れ、「西洋的近代とは別の普遍にいたる道筋を示している」と正子の身体感覚への信頼を語る。

第一章では小林秀雄からの影響を論じている。

白洲正子は批評家の小林秀雄から文章指南を受けたと言われているが、影響は文章指南だけに終わるものではなかった。

小林秀雄が「当麻」で引用した世阿弥の言葉「美しい《花》がある。《花》の美しさという様なものはない」という言葉を、お

能の演じ手である正子は直感的に体得している。「花の美しさなんて夢みたいなものを空想していて、お能は舞えない。文学だって同じなんだ」と述べる正子に対して、野村氏は、正子にとって美とは、「美学」という観念ではなく、一回性を語調として含意する「美」そのものであり、それは「言葉を失い、意識も視線もそこに吸い込まれていくような、目の前にある「もの」や「こと」を指す」ものとして顕現している、と言う。それは、『花伝書』を座右の書とする正子が、観念ではなく「具体的形状として、色彩として、音として、美は存在するのだと、確信を一層、強くしていくことになった」と述べている。

第二章は正子の能楽論である。

能の演者としての経験が白洲正子を形成した。野村氏は「巡礼や神仏習合、そして西行や明恵などなど、正子がメイン・テーマとした題材のすべてが、正子の能楽への深い関心が起点となっており、それが「放射状に広がっていく形で、その最終形態として、正子の日本文化論が形成されていった」と述べている。

言ってみれば、扇の要となるのがお能であり、骨にあたるのが「西国巡礼」であり「西行」であり「かくれ里」などである。それも、固定して飾られている扇ではなく、正子の言葉で言えば「身体で表現することの出来る生きた言葉」としての扇であり、それをひらひら舞うという印象であろうか。

野村氏は、正子が、「まれびと」概念をつかいお能「翁」を素材に芸能発生の起源を論じた折口信夫に強烈な影響を受け、古代

民俗文化へ傾斜していく道筋を追い、さらに折口の手である柳田国男との交差を跡づけていく。

第三章は日本人の信仰という壮大なテーマで論じられる。

お能の起源に修験道や密教があり、正子自身も語るように「アニミズムという信仰ともいえないような信仰を身につけたのも、深く掘り下げていけば元はお能にある」とする正子に対して、野村氏は正子が「自らの身体に刻み込まれたアニミズムの感性、すなわち自然崇拜を基調とする古代信仰の感覚を発見する」ことになったとして、それは「近代の知性や理性とは真つ向から対立」するものであった。

「日本人には『信心』という言葉がある。『何』とのおはしますかは知らねども』の何ごとかを信ずるところである。たしかに、私達は、外国人がいう意味で宗教も信仰も持たないかも知れないが、もしかするとそれ以上に、熱烈な信心を秘めていないとはい切れない」という正子の言葉を受けて、野村氏は、それは「言語によって構築されたような近代の自我（コギト）の外部に私たちを連れ出す。前意識的な言葉にならないもの、私たちの身体の中に存在する予感あるいは直感、あるいは生成変化する畏怖や清浄の感覚それ自身が、私たち日本人の信仰心なのである」と正子の感覚を支持するのである。キリスト教やイスラム教などの一神教にはない信仰の姿を開示してみせる。

はたして、信仰とは何かという壮大なテーマを巡って、正子と野村氏の掛け合いの二人旅はつづく。

第五章は代表作「かくれ里」を巡って展開される。前章の日本人の信仰の問題を引き継ぎながら、さらに、次の章の神仏習合の問題をも視野に入れて論じられていく。

野村氏は「かくれ里」という言葉にふたつの含意があるとしてそれを明らかにし、アニミズムとの関わり、神体山信仰、そして日吉神社の山王祭「みあれまつり」から、みあれのエロスが、西田幾多郎の「場所」概念とベルグソンの「純粹持続」の概念と近似していることを論証し、さらに、物語の起源を論じつつ正子の歴史認識、歴史感覚の独自性を浮き彫りにしていく、そのたたみかける手法は多元的で鮮やかである。ここはじっくり読んでこそ多くの示唆を受けとることができる。

最後の章は神仏習合の美学としてまとめられている。本地が日本の自然であり、垂迹が仏とする正子の「神仏」概念が学術的な本地垂迹説とは異質で、それは美的感覚に近いものであるとする。そして正子が体得した日本文化が時系列を捨象し、原始と現代を一直線に結ぶ、美として、直感して顕れる。野村氏は、リアリティの稀薄な現代社会にあって、正子の紀行文や巡礼記にリアリティを感じるのには、「旅に出て、その場所に立ち、自らの身体に喚起された原始的な感覚を確認」して「身体感覚に風土や民俗との接点を見る」という「その過程のなかで確信されたものが正子の日本文化であった」からだと述べる。その直感や美的感覚を信頼してやまないのである。

さて、ここまで読んできて、いくつかのキーワードを拾い上げ

ることが出来る。

神仏習合（そして仏教以前）・場所（そして国つ神）・アニミズム（身体とコスモス）・自然・神体山・磐座と、ここまでくるとやはり記紀、とりわけ「古事記」の世界が気になってくる。

白洲正子も巡礼や山河や隠れ里をめぐりながら、様々な神仏に出会い、古代信仰に言及するなかで、記紀神話の神々にも触れてはいるが、真つ正面からは論じたり書いたりしていない。もはや、これは無い物ねだりだが、習合した「神仏」という信仰の有り様や中世的感性で、何よりも美的直観で、仏教伝来以前の神々が跋扈する「古事記」の世界を正子が歩いていたら、という興味は尽きないのである。

最後に「絶対性を帯びた存在でありながら日本の神仏は非中心化しあう無限の神仏の複合体としてある。中心化と非中心化が複雑に入り組んだシステムとして日本の神仏はある」というテーゼは、けっして宗教だけに限定されるものではなく、文化をめぐる、おそらく今後の野村氏の問題意識の広がりと期待を感じさせるものである。（日本）という（システム）の課題として。

（新典社、二〇一四年二月、二〇六頁、一五〇〇円＋税）

（いとう・のりふみ 本学非常勤講師）